

重の割に、もみ重は小さく、もみ生産の効率は日本稲に劣るのが普通です。すなわち生育期間、特にその中期以後に茎葉の繁茂が著しく、このことが養分競合、相互遮へい、倒伏などを助勢し、これらが栽植密度の限度が日本稲より小さいことの理由と思われまゝ。このような状態のこの地域の水稻に対して窒素肥料を施用すると、前記の傾向がますます助勢され、乾物生産の増加が穀実生産に結びつきにくいことが当然予想されます。実験(A)では、株間を40cm×40cmと大きくあけ、株間相互遮へい、養分競合、倒伏などがおこりにくい状態にして窒素を与えた場合の、一株の穂数、一穂粒数の増加による収量の増加の可能性とその場合の各生育段階の稲の状態を考察するものです。実験(B)では株間を15cm×15cmと極端に小さくして、面積当りの株数を増した場合の生育パターンを追跡するのが目的であります。(B)の場合には与える窒素量が比較的少なくても、収量の頭打ちが早く来てしまうのではないかと予想されます。生育調査によって得られる一般農家の株間間隔との比較から、現行栽植密度の妥当性もある程度検討されうらと思ひます。(A)、(B)はいずれも一般農家とほぼ同じく6月播種、7月移植ですが、(C)、(D)では2カ月遅らせてあります。それは晩植によって、生育期間を短縮し、過剰の茎葉の繁茂を避ける試みを意味します。つまり晩植によって密植、増肥がある程度可能にならぬものかというわけです。

ラングシット試験場はバンケンほど病虫害もなく、農夫婦も、よりじゅんぼく、仕事熱心で安心して任せることができました。実験(C)の窒素最多量区に、最後になって穂首イモチが出たほかは順調に終わりました。

タイ国芸術局主催

「歴史考古学セミナー」

に参加して

石 井 米 雄

I

「タイ国文部省芸術局主催の第2回「サマナー・ポーランナカディ」を、チャイナート市で開催することになったので、貴下をお招きしたい。」という趣旨の手紙が、京大東南アジア研究センター・バンコク連絡事務所に届けられたのは、2月初めのことであった。

「サマナー」という語は、1950年のアカデミー版辞書 *photchananukrom* にはまだ収録されていない新語で、「セミナー」を意味する巧みな造語である。最近のセミナーばやりから「サマナー」はすっかりタイ語の日常語彙の中に取り入れられ、今ではテレビの人気番組「私はだれでしょう(サマナー・ナックスープ、ナックスープは探偵の意)」のタイトルにまでなっている。「ポーランナカディ」は「考古学」の意。したがって「サマナー・ポーランナカディ」とは「考古学セミナー」ということになる。

ところで1960年にスコータイで開かれた第1回セミナーの報告書¹⁾を見ると、「スコータイ期(サマイ・スコータイ)の考古学」と、

1) Krom Sinlapakon, *Khambanyai Sammana Borannakhadi Samai Sukhothai Pho. So.* 2503. Bangkok: 1964. v+303 p.

はっきり時代の限定がついている。タイ国の考古学は、大学でも芸術大学だけで講じられている、という事実からも推察されるように、もっぱら美術考古学であり、その対象を歴史時代の遺物・遺跡にかぎった歴史考古学として発達してきたのである。これは古く、ラーマ4世王(1851~1868)が、王宮内に「集古館」を建てて古美術品の収集をはじめたとき以来、今日まで一貫してつづいている傾向である。したがって「ポーランナカディ」を「考古学」と訳すとき、とくに「サマイ・プラワティサート(歴史時代)」と断わらない場合でも、おおよそ「歴史考古学」と考えて差しつかえない。「先史考古学」にはむしろ「先史学」と訳すほうがふさわしい「ウィチャー・コーン・プラワティサート」という語が

用いられる。²⁾ 芸術大学では、この名称の授業で、先史考古学の方法論が講じられている。

今回の第2回セミナーでは前回のように時代の限定はなく、地域がチャイナートに限定された。とり上げられた時代は、ドヴァーラヴァティ期(6~11世紀)、ロップリー期(11~14世紀)、スコタイ期(13~15世紀) ウートン期(12~15世紀) およびアユタヤ期(15~18世紀)である。

II

チャイナート市は、バンコクの北方およそ230km。チャオプラヤー河に沿った小都邑で、市の東南8kmの地点に、有名な「チャオプラヤー・ダム」がある。このダムは1957年に竣工した農業用灌漑ダムで、チャオプラヤー河流域の耕地5,700,000ライ(1ライは1.6km²)の灌漑を目的として建設されたものである。さすがタイ国の官庁の白眉と言われる役所の仕事だけあって、ダムのわきには灌漑局専用の立派なホテルが設けられている。地方都市の宿泊設備の貧弱なタイ国で、多人数のセミナーを開くとき、第1に問題となるのは宿舎の容量の問題だが、芸術局長も開会の挨拶で述べたように、この「ホテル」の存在が、セミナーの開催地としてチャイナートが選ばれた原因のひとつであろう。

2月19日(日)。バンコクの国立博物館の前に、60数名のセミナー参加者が勢揃いする。アカデミーのアヌマン・ラーチャトン博士、NRCのプラサート・ナ・ナコン教授、サヤムラット紙のククリット・プラモート氏、チャ

2) 「ポーランナカディ」も定義上は先史時代を含む。なお「ポーランナカディ」および「ウィチャー・コーン・プラワティサート」の定義については M.C. Subhadradis Diskul, "Wichakon Prawatisat lae Kon Prawatisat Thai," *Sankhomsat Parithat-Special Edition*, Dec., 1964. pp. 1-14. および Chin Yudi, "Wichakon Prawatisat lae Kon Prawatisat Thai," *ibid.*, pp. 15-26. 参照。

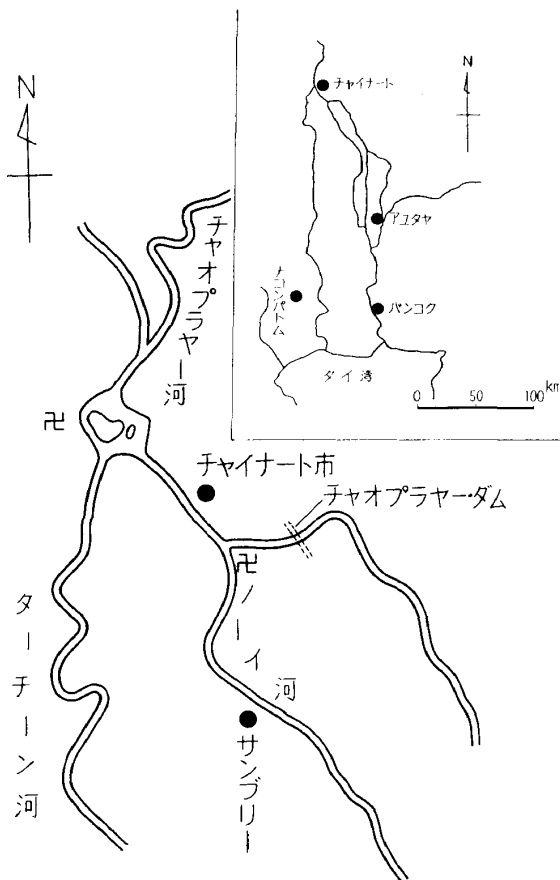


図1 チャイナート附近

オ・タイ紙の論説委員で、仏教研究家として著名なサティエン・パンタランシー氏など、旧知の顔が大勢見えるのは心強い。バス、ステーションワゴン、ジープを連ねてパホンヨーティン街道を一路北上する。6時過ぎ、川面に映える夕日を背に受けながら、予定された宿舎兼会場の「灌漑局専用ホテル」に到着、先発の芸術局係官の出迎えをうける。

III

翌2月20日(月)。ホテルの大広間にしつらえた会場には、昨夜のうちからマイク、黒板、地図などが手ぎわよくととのえられ、セミナーの開始を待ちわびている。午前8時30分。チャイナート県副知事の歓迎の辞。つづいてタニット・ユーポー芸術局長の開会の挨拶があって、5日間にわたる「セミナー」の幕がひらかれた。

第1日目のプログラムはまず、ポー・シーワーライ知事(副知事代読)による「チャイナート地理概説」があったのち、灌漑局次長による特別講演「チャオプラヤー河開発史」を聴いた。ここでは、アユタヤ時代以来もっぱら交通路として用いられた運河が、チュラロンコン王(1868-1910)の時に至って、輸出米増産の必要にせまられ、大規模な灌漑計画へと発展していった過程を後づけ、1903年の運河局創設にはじまったタイ国の近代的灌漑発達史を8つの発展段階に分けて要領よく説明した。

今回のセミナーは、現地調査を平行して行なうという趣旨から、毎日のように excursion があった。20日の午後は、まずチャイナート市の北にある名刹ワット・タマヌーンを見学したのち、ナコンサワン県のパユハキリまで北上し、1964年英国人 H. G. Quaritch Wales 博士らによって発見され、その後芸術局係官の手で発掘が行なわれた、ター・ナムオイ村、ワット・コーク・マイデンの遺跡を



写真1 ワット・タマヌーン

訪れた。この遺跡はドヴァラヴァティ時代の特徴を示しており、同時代のものと推定される。(タニット・ユーポー氏はこの遺跡の地点が、7世紀にハリブンジャヤを統治したモーン族の女王チャーマデーヴィが建設したと伝えられるムアング・プラバンであるという仮説を提出している。)³⁾ 現在この遺跡のすぐ近くに二、三の僧房があって、黄衣の僧数人が起居している。近くに寺もないのにどういふことだろうとたずねてみると、これは遺跡の盗掘を防止するために芸術局が考え出した苦心の策で、近在の寺院の協力を得て遺跡の近傍に僧房を建設し、ここに起居する僧侶に盗掘の監視を依頼しているとのことだった。「それでも油断はできません。ついこの間も、芸術局長の偽書簡を示して、発掘品をバンコクに移すからと言って立像の足を盗もうとした事件がありました。」と僧侶の1人が語っていた。

20日の夕食後8時からは、サティエン・パンタランシー氏による「チャイナート仏教史」と題する講演があった。この講演それ自体からはそれほどの感銘は受けなかったが、講演終了後質問の時間になって長時間続けられた討論は、タイ国における歴史学研究の一断面を示して興味を引いたので紹介しておきたい。

3) The Fine Arts Department, *Some Recently Discovered Sites of Dvāravatī Period*. Bangkok : 1965. p. 15ff.

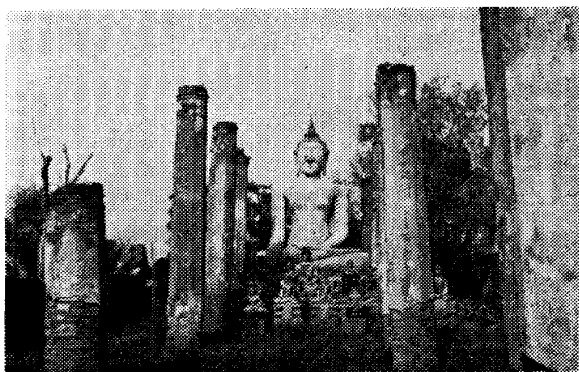


写真2 ワット・マハータート

午前中の「チャイナート地理概説」でもそうであったが、サティエン氏はその講演の中でチャイナートの歴史にふれ、アカデミー版地名辞典(Akkharanukrom Phumisat)の記述を引用して、ラーマカムヘング王碑文に見えるムアング・プレクをチャイナートに比定した。またアユタヤ王朝初代の王ラーマティボディ1世は、王位継承をめぐる発生した紛争に乗じてスコタイを攻め、チャイナートに兵を進めてこれを占領し、クン・ルアング・パゴアに統治を命じた、と述べた。この第1の点については、二、三の質問者によってダムロン親王、セデスらによっても指摘されているとおり、ムアング・プレクはチャイナートではなくサンプリーであるとの反論がなされたが、数学者であり同時に歴史学者、とりわけ碑文に造詣の深いプラサート・ナ・ナコン教授(カセーサート大学副総長、NRC次長)は第2点の論拠の不備につき、(1)現在無批判にチャイナートに比定されている地名は、Sihingganidanamのパーリ語原文ではdvisakhanagaraで、これをタイ語に訳せばSong Khwae(川が二又に枝分かれしているところ)となる、(2)old chainatの位置をチャオプレーヤ河とノーイ河の分岐点にとれば、地名の語源は説明できるが、チャオプレーヤ河が二つに分かれているのはここばかりではない、(3)スコタイ碑文No.7-kho, No.8などに現われるSong Khwae

は文脈から判断してピサヌロックと推定されているが、Sihingganidamに言うdvisakhanagara(=Song Khwae)はこのSong Khwaeであり、したがってチャイナートではなくピサヌロックと考えるべきである、と論じた。これに対しトリ・アマタヤクン氏らは、同様の叙述のあるJinakālamāliでは、この地名はJayanādapuram(=Chainat)であり、チャイナートに間違いないと反撃した。これはさらにかれらの論拠とするtamnanないしphongsawadanの史料価値⁴⁾論争にまで発展することとなった。両著作のタイ語訳者であるマハー・セエングをはじめとする「旧派」の学者たちは、これらの史料の記述の真ぴょう性を支持して譲らず、最後には芸術大学のスパトラディット教授がおよそ史料なるものの種類とその価値についてのきわめて初歩的な講義を行なってこの「論争」に決着をつけようと試みたが、結局たがいにcommunicateできぬまま物分かれに終わってしまった。この「論争」を通して感じられたことは、tamnan, phongsawadanに通暁している「旧派」の学者たちは、これらの古典的作品に対する愛着が、一種の信仰と化してしまっていて、ほとんど批判を受けつける余地がないということ、もうひとつは、この公開討論の席に連なっていた若い歴史学者たち——かれらの中のある者は欧米の大学の学位をもっている——が終始沈黙を守って、まったくこの論争の外に身を置いていたことである。かれらは伝統的な学問の方法に固執する旧派の学者を陰で批判しながらも、自身のbehaviorはあくまでもタイの伝統社会の《achan-dek(師弟)》関係の枠内に閉じこめられており、かれらの師ないしは師と同列におかれている《achan》たちの言説を公に批判しようとはしないのである。この辺に、タイ人自身によるタイの歴史

4) これらはいずれも15世紀(Sihingganidānam)ないし16世紀(Jinakālamāli)の著作。

研究の進歩の障害を垣間見たような気がした。

IV

2月21日（火）セミナー第2日。今朝は早朝からバスでサンブリーに向かう。会場はチャイナートの「ホテル」から、サンブリーのワット・マハータート寺院の簡素な講堂に移される。午前8時30分。ククリット・プラモート氏の「古代におけるチャイナートの社会・経済」が始まる。王朝年代記にあらわれる断片的な記事以外にこれといってまとまった史料のない現状においてチャイナートひとつだけを取り出してその社会・経済史を論ぜよということ自体、はなはだ無理な注文であり、話題はいきおい中部タイ一般へと向かうことは当然であったが、氏一流の皮肉を交えた巧みな話術に時の経つのを忘れる思いがした。これにつづいてスパトラディット教授の「サンブリー派建築について」という講演があった。その後昼食小憩ののち、カチョン・スカパーニット氏の「チャイナートの歴史的的重要性について」と題するペーパーが、トリー・アマタヤクン氏によって代読された。この中でカチョン氏は、アユタヤ年代記にいうムアング・トライトゥルングはサンブリーであって、

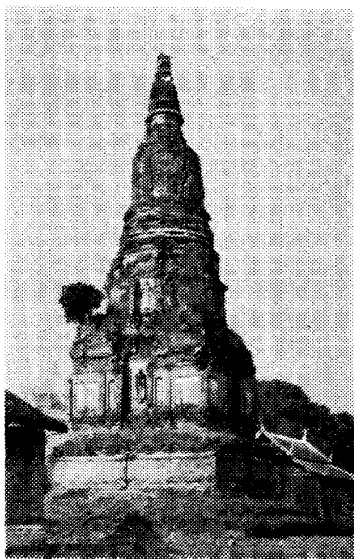


写真3 ワット・プラケオ

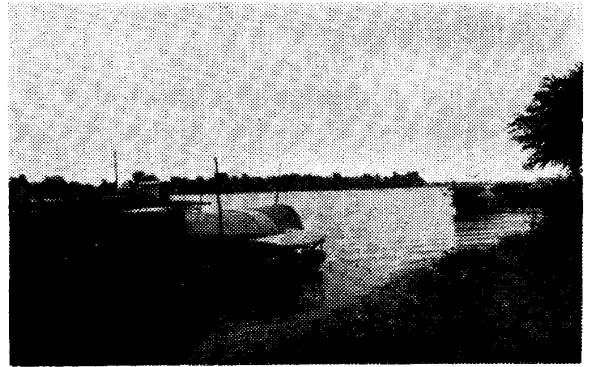


写真4 ワット・ボロマタート附近

その南方1日行程の地点にあったと言われるテープナコンは旧サンブリーであるという新説を出していたが、本人が病気でセミナーに欠席したため質疑は行なわれなかった。

その後でワット・マハータート、ワット・プレイヤープレーク、ワット・プラケオ、サンブリー城壁跡、ワット・チャンを見学した。

翌22日（水）には会場をさらにワット・ボロマタート寺院に移し、ここでナコンサワン附近の発掘現場から駆けつけた芸術大学の考古学担当マニット・ワンリポードム教授の講演「チャイナートで発見されたプラ・ピム」を聴き、つづいて近くにある「チャイナートムニー博物館」を見学した。この博物館は、チャイナートムニーという人物が個人で収集した358点の美術品を、芸術局に寄贈し、これを展示格納する建物を芸術局が建設したもので、1966年12月27日開館したばかりのきわめて新しい博物館である。幅30m奥行き10m、コンクリート造2階建ての瀟洒な建物の中には、ドヴァラヴァティをはじめ、ウートン、アユタヤ時代の仏像、神像などが手ぎわよく展示されていた。

午後はチャイナートの北の町マノーロムから船に乗ってワット・マカムタオを見学し、そのままチャオプレイヤー河を下ってチャオプレイヤー・ダムまでの船旅を楽しんだ。

翌23日（木）は、アユタヤ末期、ビルマ軍のはげしい攻撃を受けながら最後の一兵まで

戦い、遂に全員戦死したという歴史のこのこるカイ・バングラチャンの古戦場を訪ねた。ここは現在ボーイスカウトの訓練キャンプになっている。この戦跡を永遠に記念するため、現在勇敢な民兵たちの碑を建設する準備が進められている。

23日の夜8時から、県視学官のタウン・タクンシー氏による「チャイナートの民俗芸能」という講演を聴いた。タウン氏は現在チャイナートに伝承されている芸能を(1)民謡、(2)遊戯、(3)なぞなぞの3種に分類し、これらがシンブリー、アントン、ウタイターニー、ロップリー、アユタヤ、スパンブリ等と共通している点を指摘した。中学校高学年の生徒による実演を交えながらの巧みな解説に夜のふけるのを忘れる思いがしたものである。

2月24日(金)、セミナー最終日は会場も県庁会議室に移し、閉会式にふさわしいformalな雰囲気だ。10時15分チャイナート県知事の「今日のチャイナート」と題する特別講演、これに続いてタニット・ユーポー芸術局長の閉会の挨拶をもって、5日間にわたる「サマナー・ポーランナカディ」は無事終了した。

おわりに

今回のセミナーは純然たる国内セミナーであったので国外からの参加者はなく、外国人は私のほか Siam Society の Mr. J.J. Boeles, タイ美術史研究家の Mr. A.B. Griswold, 医科大学の Victor Kennedy 講師らが討論に加わったにとどまった。しかしタイ人の参加者は多彩な顔ぶれで上にあげた学者の外、チュラロンコン大学、芸術大学、チェンマイ大学の関係者、芸術局専門家の大半が全国から集められており、タイ国の「ポーランナカディ」の現状を知る上に大いに有益であった。わたくしのセミナー参加についてお世話下さった芸術局のソンポング・シーサムラン氏、国立図書館のメンマート・チャワリット女史に厚くお礼申しあげる次第である。

インドネシアに学んで

崎 山 理

I シスワ・ロカンタラ財団

東南アジアにおいて今もなお最も目まぐるしい動きを続けるインドネシアに私が滞在したのは、1964年9月から1966年10月までの約2カ年である。この間に私はマレーシア対決、国連脱退、9月30日運動、平価切下げ等の矢つぎ早に起こる政治的事件を身をもって経験し、また、それによる影響が私の滞在目的にも及んでその目的の変更を余儀なくされる場合も起こったのである。私の渡航はインドネシアにおける唯一の組織的な外国人学生招聘機関、シスワ・ロカンタラ財団の選考に合格して許可が与えられたものであるが、この財団の存在については日本であまり知る人もなく、まず簡単にその紹介をしておく。ただし、断わっておかねばならないのはインドネシアには「××財団」という少人数で運営されている財団が数多くあって、財団という名称から決して欧米の、またわが国のそれを想像してはならないのである。組織は援助資金財団(全インドネシア向けの宝くじを販売し、その収益は社会建設にまわす。総裁はスカルノ大統領)の傘下において、資金源としての月月の予算は全くこの援助資金財団に頼っている。このシスワ・ロカンタラ財団の目的とす